

五、クーデタ、亡命

ルクリュ兄弟がフランス横斷の徒歩旅行をした時分の同國の社會狀勢は決して安定してはいなかつた。歐洲革命亂以來の時潮の干満が大きく動いていた。その一八四八年の革命に於て、國會にも政府にも、多數の勞働代表や社會主義者が名前を列ねたことは前段にも述べた通りである。その中でも政界を指導したルイ・ブラン (Louis Blanc) ビュシェー (Bucher) コンシデラン (Considerant) ヌール・ルルー (Pierre Leroux) プルドン (Proudhon) シャン・レイノー (Jean Reynaud) 等のような代表的人物が種々な改革案を樹てて社會主義的施設に着手したことは歴史上未曾有のことであつた。ルイ・ブランや、その同志アルベール (Albert) が、進歩省即ち勞働省の設立を要求したり、國立工場の創立を唱えた時、保守黨がこれを喜ばないで妨害したばかりでなく、パリの勞働者達も、その公立の慈善事業やルクサンゴール委員會 (ルイ・ブラン等の) やに就て餘り多くを期待しはしなかつた。何よりもパリのプロレタリアが不満だつたの

は、新指導者等が、專制主義と帝國とに連繫を持つ三色旗を棄てず、當時の彼等がデモクラシイの目印と認める赤色旗を採用しなかつたことであつた。このルクサンブル委員會というのは、一八四八年三月一日ルイ・ブランを委員長とし、五百人の労働代表、二百三十人の工場主代表を以て組織し、既存の全協同組合を細密に調査し、サン・シモン派、フーリエ派・經濟學諸派等の意見を詳細に徴し、四月二十七日には、その結論を得て一案を立てたが、それは鐵道や、運河や、鑛山や、信用事業や、保險事業等を國有にすること、進歩省（即ち労働省）を創設して總ての産業の賃銀を一定し、總ての商業の物價を制定し、國家專賣事業の利益を以て労働省の生産組合に出資すること、及び各府縣に百家族づつの農業殖民を設けること、等を提案したものであつた。しかし、五月十五日、群衆は議會に侵入し、有名な社會革命家ブランキは、民選議員等に對して單に被壓迫民族（分割され暴壓されたボーランドに佛國が干渉せんことを當時の民衆は要求した）のみならず、貧困なフランス人に就いても考慮せよ、と催促した。

六月二十一日、國立工場は閉鎖され、被收容労働者中の十八歳から二十五歳までの者は、軍隊に編入せられ、その他は各地方に土工として送られた。その翌日、道路には男女の長大な行列が続き、『パンを、然らずんば彈丸を！』と叫びつつ流れ行くのであつた。二十三日にはパリにバ

リケードが築かれ、内亂は二十六日まで続けられ、六千人の労働者は虐殺せられ、次で數週日の間に八千人の大衆が全國各地の牢獄に投じられ、三千四百人はアルジェリヤ（アフリカ）又はギニヤンス（南米佛領）に護送せられた。百合花を表わした王黨の旗は幾つかのバリケードを占領し、正統派は下層民の間にこれ見よがしに若干の黄金をばら撒いた。既に現われたボナパルチスト即ちナポレオン三世派は多くの十字路でその戰鬪を指揮していた。そして叛逆運動の激發者や首領は赤色派だけと見なされて、その一味だけが捕縛された。一八五〇年に三十箇所の特別選舉が行われたが、フランスの土地にはデモクラチックの種は全然根を卸さないと一部の人に信じられたに係わらず、却て強い萌芽の生出を示すに至つた。即ちヴギダル及びユージェン・スー等二人の社會主義者と數人の共和主義者が選出されて、立法院に現われるに至つた。そこで五月三十一日に普通選舉制は廢止され、選舉人數は三分一に減少された。即ちそれは共和制が徐々たる自殺を遂げつつあることを示すものであつた。

四十一箇月以來、北より南へ、東より西へと赤色旗狩を行つたが、それでもなおフランスには社會主義者が嚴存した。（一八五一年十二月二日）ヴキクトル・ユゴーによつて起草された強烈な抗議文に署名した二十一人の人民代表者中にも前述のユージェン・スーがいた。三日の拂曉

に、武装蜂起を告示した労働團體中央委員中にも、同日築かれたバリケードの上にも多くの社會主義者がいた。その翌日、死者四百人、負傷者六百人が數えられたが、その中の多數は勿論社會主義者であつた。

裁判というも單なる形式に過ぎないで、簡單無造作な命令執行によつて、死刑に、流刑に、禁獄に處せられたものが二萬六千九百人に及び、こうして帝制は樹立されるに至つた。これが即ちナポレオン三世のクーデタと稱せられるものであつた。エリイ、エリゼの兄弟がフランスの西端ピレネー山の麓なるオルテの里に久々にて兩親の膝下に歸えるや否や、彼等は忽ちこの警報に接したのである。

一八四八年の革命には、労働者代表や社會主義者が少なからず重要な地位を占めたに係わらず、何れも成果を挙げずして難を避けねばならぬ状態に陥つた。ルイ・ブランも國立工場案その他の計畫を妨げられ、ブルードンも人民銀行案を妨害せられ、兩人とも一時國外に亡命せざるを得ないありさまであつた。當時同盟罷業は犯罪として扱われ、一八四八年二月からクーデタまで、千五百一人の労働者を含む二百五十九の同盟罷業が訴追せられ、二十三人が一年以上の禁獄に處せ

られ、千五百一人が一年以下の禁錮に處せられ、罰金刑には百八十人が處せられた。抑もこの動亂は、最初は急進的ブルジョアジイと民衆とがルイ・フィリップ王の統治に對する共通の反感によつて、その階級的對蹠性を一時糊塗したところの革命的行動（一八四八年の）から端を發したものである。オルテの有力共和主義者の多數は、その近傍諸都市の成りゆきを注意深く觀察し待機して、直ちに事件に巻き込まれることを避けていたが、ルクリュ兄弟は若干の友人とともに行動を開始し、宣言を發し、市廳の占領を試みた。しかるに力足らずしてそれは失敗に歸し、却て兩人とも流刑者名簿に記入されるに至つた。これを知つた彼等は迅速に他國に亡命せざるを得なくなつた。一八五二年一月一日、彼等は無事に英國に上陸することができた。これには興味ある秘話があつた。ナポレオン三世のクーデタは成功したが、その一派は再び民衆の蜂起を恐れて、嚴重な復讐的處罰を全國津々浦々にまで斷行すべく命令した。オルテの町役場へもその布告が届いた。これを知つた町長は豫てから深い尊敬を寄せていたルクリュ夫人に急いで息子達の危急を密告した。息子達は既に事の敗れたことを知つて、英國に脱走して、そこでなお人生修業と社會學の研究とを続けようと思つて決していた。慈愛深き母は如何に劃策したものか、五百フラン（當時これは大金であつた）の金を工面して子等に授けた。遠いハーヴル港まで事もなく到着したが、

そこで彼等は、平生父牧師と神の福音を語ることを非常な誇りとしていた一豪商を訪うたところ、この『キリストに於ける兄弟』は若き共和主義者を家に招き入れることを欲しなかつた。進退谷まつた兄弟は、その時一人の正直な老船長に遭遇した。彼はこの青年達の明朗にして善良な容貌を見て、彼等の爲に善行證明書を作製して與えた。その渡英船上に於て一人のハンガリー革命家と識りあいになり、その導きによつてロンドン市内の適正なところに一室を借りることができた。

彼等は先ずロンドンに於てフランス語の教授を始めた。しかしながら、英國に於ける彼等の生活困難は容易ならぬものであつた。エリゼはまだ極く若い一青年であつたが、エリイはそろそろ一人前の紳士になりかけていたので、當時の舊式なイギリス社會で交際するには、手袋・燕尾服、シルク・ハットと言つた工合に服裝の心配からせねばならなかつた。亡命の貧書生などには勿論できないことであつた。それにフランスと言へば『墮落と輕薄』の國で、そのフランスの人といへば大てい共和主義者か社會主義者で、神様の律法を輕蔑する人々と思われていた。ジョン・スチュアート・ミルのような人物さえ、平生通信で非常な敬慕を捧げていたビエル・ルルーの訪問を受けた時は、また非常な冷遇をこれに與えたという物語のあつた時代である。勿論多くの

亡命者が大陸からロンドンに集まり、何か有名な業績でもあるものは、かなりの優遇を受けたが、無名の人士などは困窮すればするほど顧みられない有様であつた。ルクリュ兄弟が貧困のドン底に生活せねばならなかつたことは當然である。それでもプロテスタントの牧師の子供として同じ新教の英國に於て些かの便宜が與えられもした。

かくて兄のエリイはロンドンとアイルランドとの間を往復して、一貴族の子供達の教育を托せられ、次でアイルランドのフェアフィールドというブルジョアの少年達の教育を擔任することになつたが、エリゼはそうした細かい仕事を好まないで、却てアイルランドのウキツクラウ伯爵領で農業勞役に従事すべく勢い込んで赴いた。當時の大ていの大地主達がするように、その地主のウエブスター一家も、この土地に居住しない時が多く、エリゼにキビュールという處の八十二ヘクタール（一ヘクタールはわが國の一町二十五歩）の土地の再經營法の企劃を依頼した。エリゼは刻苦して精細な地圖を作り、開發の障礙となる箇條を列舉し、土地改良法を指示した。然るに彼は、さしにも熱中したこの事業を放棄して、一八五三年に北米に渡航した。それが何のためであつたか明白ではないが、種々の點からその理由を考察するに、先ず第一に廣い處女地を見つけ、そこに自由共産的の社會生活を樹立したいという希望を懷いたこと、第二に人類の生活する

諸方の世界を廣く研究したいと考えたこと、これであつたらしし (Elise Reclus "Correspondance" 参照) しかし、元來無二物の亡命者たりし彼は、大西洋を横斷するにも容易ならぬ苦勞をした。即ち一帆船に乗込んでその船賃を支拂うために慣れもしない料理人となり、北米に上陸してから、或はニューヨークの波止場人足となつたり、或は鹽漬工場に勞働したりした。それから彼はニュー・オルレアンに行つたが、そこで彼は一移住者の家庭教師となつて忽ち厚い信用と尊敬とを受けるようになった。彼が具さに黒奴所有社會の厭惡すべき實情を考察して、熱烈な奴隸制反對論者となつたのは、實にかの南北戦争勃發よりも五年以前のこの時に於てであつた。

一八五五年から一八五六年にかけて、彼は中米、南米の諸地方を旅行し、農業を營むべき好地所を探索した。殊にヌーヴェル・グルナード (コロンビア) には友愛的協同社會の建設を夢みて乗込んだ。然るに一八五七年に、彼は倉皇として祖國に歸つた。故國にて大赦令が發布せられたことを聞いたからである。兄のエリイは一八五五年中に既にパリに歸つていたのである。

ここでエリゼ・ルクリュの戀愛に關する一挿話を記さねばならぬ。それは蓋し彼の生涯に於ける最初の戀愛問題であつたであらう。前記したニュー・オルレアン附近の一家庭に家庭教師とし

て入つた時のことである。彼ははしなくも、その家の娘なる、現在の自分の生徒の戀的になつたのである。彼もまた同じ愛情を感じなかつた譯ではない。しかるに彼の意思は、その初戀を斷ち切つて了つた。彼は奴隸所有者たる一族の中に入ることを欲しなかつたのである。かくて彼はルイジアナを去つてニュー・グラナダ (ヌーベル・グルナード) に赴いた。その時から、彼はフランスに歸り次第結婚しようという意思を持つたことが、兄エリイへの手紙によつて明知される。そのみならず、北米合衆國で侮辱される人種の娘と結婚しようという考えまで、彼は既に決定していたらしいのである。サント・フォア (彼の生地) にいた青年時から、彼はブリアン (Briant) という一族のあることを知つていた。その名の綴りから見ると、それは英人かフランス人の名であるが、その老婦人の子息が、セネガル (西部アフリカの黒色人種) 婦人マリイ・ヨンという人との間に儲けた二人の娘を養育していた。察するところ、その娘達の父たる遠洋航海船長ブリアン氏は、國籍上は米國人でありながら、米本國にては娘達が侮辱を受けるであろうことを厭うて、そのことのないフランスを子供達の住地に選んだのであらう。尤もこのブリアン嬢とエリゼとを實際に引合せたのは、兄エリイの妻君で、それはエリゼがアメリカから歸國してから間もない時のことであつた。そしてブリアン氏の長女クラリス嬢 (Clarisse) との婚約は決定し

ながら、それが決行されたのは翌年であつた。それは恐らく宗教上の難題に基くものではなかつたろうか？『子供に洗禮を施さないということが許されない限り、子供は持たない』とエリゼは言つていたとのことである。しかし、この若き婦人の徳望はエリゼの心臓を把握した。その壓倒するばかりの美しさ、その限りなき親切さを持つた彼女は、まことに慈愛に満ちた母であり、また常に夫の意中を敏察する賢妻であつた。それは實に完全な夫婦であつたと言われるが、しかし好事魔多しで、クラリスの天命は短かかつた。二人の子女を遺してこの愛妻が逝去したのは、エリゼがなお三十九歳の時であつた。その二人の子女は、ともに結婚してマガリ・レニエ (Magali Regnier) 及びジャンニ・クイジニエ (Jeanne Cuisinier) を稱し、ともに合せて十一人の家族を成してゐる。